

俺のグランチャー

汚いぶらぼう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スツポンポンじゃないか！（OP）

目

次

俺とグランチャーリー

俺が強いんじやない

11 1

俺とグランチャヤー

裏切り者である伊佐美 勇の確保または殺害のため、深海7000mのオルファン格納庫でカナンはグランチャヤーに乗り込み、出撃準備を整えていた。

「カナンの出撃は中止だ！」

「なんて言つたの？」

グランチャヤーのコクピットから顔を出し、カナンは疑問の声を上げる。それに答えるよう、リクレイマーの男が叫ぶ。

「ジョナサンとオレノが出る。カナン機は待機だ。」

「シラーとオレノの馬鹿も連れて行くの？」

カナンはジョナサン機の方を見て呟く。

「オレノ！シラー！ノヴィス・ノアのブレンパワードが動いている。
覚悟が要るぞ！」

ジョナサンは出撃準備を整えるために、グランチャヤーのコンソールを調整しながら、オレノとシラーに忠告する。

「わかってるジョナサン・グレーン！俺のグランチャヤーは最強だ！」

忠告を受けた男。オレノ・オレオ・トツティは自信満々に答える。

オレノの身長は高く、茶色の髪に明るい緑の瞳、胡散臭さを絵に書いたような顔をしている。

オレノのその顔にはいやらしい笑みが浮んでいる。

アンチボディであるグランチャーワーのコクピットに座りながら、ユラユラとその身を揺らし、手首足首をグリグリ動かしている。

その様子は、楽しみで楽しみでしようがないという気持ちがにじみ出ているようだ。

「馬鹿オレノのグランチャーワー自慢はなあ。もういい加減聞き飽きましたよ。」

ジョナサンは肩を竦め、呆れたようにため息をつく。

ジョナサンはかれこれオレノと3年ほどの付き合いだ。

いつの間にかオルファンにいたオレノとなんだかんだ友人となり今に至る。

たまに友人となつたことを後悔することもあるが、概ね良好な友人関係である。

「うるさいよ！最高なんだ、俺のグランチャーワー。わかっているだろうジヨナサン。俺はわかっているさ。」

「出ましたよ、いつもの押し付け。グランチャーワー、グランチャーバカリ言つて、オルファンのことなーんも考えてない。リクレイマーの風上にも置けないやつ。」

大声で己のグラントチャーワー自慢をするオレノに、ジョナサンは笑いながら返事をする。

「はいはい、馬鹿やつてないで行きますよジヨナサン。オレノ。」

何時ものやりとりであるため、シラーは呆れながら出撃の催促をする。

「わかっているさシラー。よし、注水してくれ。」

ジョナサンの命令により、注水が開始される。

注水された海水に晒されるグランチャーチャーの数は5機、その内1機は黒を基本色に一部白いラインが入った機体色をしている。

その機体がオレノの機体。オレノ・グランチャーチャーである。

「グランチャーチャー。帰ってきたらピカピカに磨いてやるからな。一緒にご飯も食べて、一緒に映画鑑賞して、一緒に寝て・・・それにキスもする。」

「相変わらずキモイなオレノ。ある意味尊敬だな。」

グランチャーチャー愛と頭のおかしさが突き抜けてしまっているオレノは、

己のグランチャーチャーにキモいことを語りかける。

それを聞いてしまったジョナサンは身震いし、ウエツと吐くふりをする。

「注水は終わつたな。よし、これ以上オレノの怪奇発言を聞いてられないね。ジョナサン・グレーン出るぞ！」

「グランチャーチャー！俺頑張るから。君のオーガニック的なパワー、最大限に引き出すから。俺のオレノ・グランチャーチャー行こう。」

「気持ちわるいよオレノ！シラー・グラス出る！」

次々と5機のグランチャーチャーはオルファンから出撃し、海中を浮上していく。

リクレイマー・グランチャーチャー部隊はオルファンのために今日も行く。

第一話 僕とグランチャーバイ

「アンチボディの反応は四つだと言うのか!?」

そんな機能不全のブレンパワードバ」ときでえ！」

勇を追い、たどり着いた場所にはブレンパワードが4機。ジョナサンは目を見開き、叫びながらグランチャーで突貫する。

「粗っぽいぞジョナサン！グランチャーは丁寧に優しく愛でるように扱え！」

突貫するジョナサン・グランチャーを追いかぐ、オレノは叫ぶ。オレノの実力はジョナサンに負けてはいない。

いざ戦闘技術となればジョナサンが上回るが、純粹な操縦技術ならばオレノが上回る。

一拳動ごと丁寧に、グランチャーを労わるような操縦はあるのクインシイ・イッサーも一目置いている。

もつともオルファンよりグランチャーであるオレノの行動や言動により、クインシイのオレノに対する総合的な評価は低い。

「ジョナサンにシラーカ！それに黒と白のグランチャー……オレノ・オレオ・トッティカ!?」

「勇？オレオ取つてほしいの？今手元にはないわ。」

相手のグランチャヤーから、やつて來たりクレイマーが誰であるかが分かる勇は、ブレンパワードに持たせたマイクロウェーブ発生器を構え、起動させる。

その後ろで宇都宮 比瑪はボカンとした表情で、見当違いの事を伝える。だいたいオレノの名前が悪い。

「敵は殲滅してええ！」

「裏切り者を倒すのに、ジョナサンが出る事はない！」

ジョナサン・グランチャヤー、シラード・グランチャヤーはソードエクスшенションを構えながら突貫する。しかし、ユウ・ブレンの持ったマイクロウェーブ発生器が起動し、グランチャヤーに搭乗しているパイロットにダメージを与える。

「ぐつ!? 頭痛かあ!?

マイクロウェーブのダメージを耐えながらジョナサン・グランチャヤーはソードエクスشنションからチヤクラ光を弾丸とし、射撃を行う。

他のグラントチャヤーはシラーを含め、パイロットのダメージで操縦がおぼつかない。

「今叩くんでしょう！ ブレンバーを使って！」

勇が振り向きながら、比瑪、ラッセ、ナンガに命令する。

「そつ・・・そつか！」

「確かに・・・黒いのがいないぞ！」

攻撃を加えようとしたラツセはオレノ・グランチャード見当たらぬことに気づく。

「一機いない？どこなの？」

比瑪は急ぎ周りを見渡すが、黒いグランチャード見当たらぬ。すると、ヒメ・ブレンに影が指す。

「そこの可愛いアンチボディちゃん！俺とグランチャードの相手をしてもらうよお！！」

ヒメ・ブレンの真上から、黒いグランチャードがソードエクステンションで斬りかかる。

「上からくる？防いでブレン！」

間一髪ブレンバーによる防御が間に合い、ソードエクステンションとぶつかり合う。

「君のアンチボディは愛されているのが良くわかる！アンチボディの肌が他のとは違う。俺から見ても美しく見える！おつと嫉妬かいグランチャード！大丈夫！君が一番美しい。俺は君を愛している！」

「気味の悪い感覚……ぞわりとくる。ブレンが……キモがつている？」

鳥肌の立つような気味が悪い感覚に襲われ、比瑪は冷や汗を流す。ヒメ・ブレンが力ずくでソードエクステンションを弾き飛ばすと、オレノ・グランチャードはすぐさま距離をとる。

「そう……俺の名前はオレノ・オレオ・トツティード！そして最強最高至

高であるオレノ・グランチャー！名乗りを上げさせてもらおう。」

「すゞくおかしな人ね……私は宇都宮 比瑪。この子はヒメ・ブレン。優しい子よ。」

お互に空中で斬り合いながら言葉を交わす。ヒメ・ブレンはまだ実戦経験に乏しく、オレノ・グランチャーに押されている。まともな戦いになつてている理由は、アンチボディ同士の空中戦に慣れていないからだろう。

「……これがブレンパワードの反発力。伊佐美ファミリーが木偶呼ばわりして破壊しようとする理由がよくわかるな。」

オレノはブレンパワードが予想以上の体力を持つていていることを知り、このことを秘匿していた伊佐美博士に対しても不信感を抱く。しかし、究極的には自分とグランチャーさえ一緒ならば、オルファンであろうと人類であろうと眼中にないため、不信感をだこうとも、リクレイマーとしてぶれることはない。

「将来的にはオレノ・グランチャーに匹敵するやもしれん。誇るんだよちゃんと比瑪！ヒメ・ブレン！良くなるぞ。だが、オレノ・グランチャーはもつと激しく良くなる。」

「誰がちゃんと比瑪かー！おバカ！」

チャクラパワーだけならばグランチャーの方が上であるが、オレノはその直感でブレンの可能性を感じ取る。宇都宮 比瑪とヒメ・ブレンは伸びる。

しかし、己のグラントチャーが最強であることに絶対的な自身を持つオレノにとつてはちゃんと褒めているかわからない言い方しかできない。

「比瑪ちゃん！そいつの言うことに耳を貸すな！おかしくなる。」

ユウ・ブレンがヒメ・ブレンとオレノ・グランチャーの間にバイタルジャンプで出現する。

そしてヒメ・ブレンを庇うようにソードエクステンションをオレノ・グランチャーに向ける。

「勇・・・グランチャーを捨てたお前が俺の前にい！」

勇に対して怒りを露にするオレノはソードエクステンションによる射撃で、ユウ・ブレンに攻撃を仕掛ける。

「・・・人類を滅ぼさないためだ。グランチャーには悪いと思っている。でもリクレイマーは間違っている。オルファンで人類を滅ぼしてしまえば取り返しのつかないことになる。わからないのかオレノ！」

「わかっていないのはお前だぞ勇！俺はオルファンとか人類とかどうでもいい！グランチャーを愛すことができればなあ！それだけで満たされるんだよお！」

オレノの怒りに呼応するように、オレノ・グランチャーからチャクラエネルギーが噴出する。そのプレッシャーに勇と比瑪は圧倒される。

「オレノ！ジョナサンがやられたみたいだ。勇のブレンパワードは体力が高くなっている。二人がかりでかかるぞ。」

「ええんやで。」

シラーがオレノに合流し、ユウ・ブレンとヒメ・ブレンの周りを囲

い攻めかかる。勇と比瑪は次第に追い込まれていく。

「比瑪ちゃん！くつつけよ！」

「狙えないよ。」

ユウ・ブレンとヒメ・ブレンが密着し、ソードエクステンションとブレンバーをカンカンとぶつけ合う。

「1・・2・・3！チャクラエクステンション！」

「シユート！」

その瞬間、2機から膨大なオーガニックエネルギーが放出され、周囲のグランチャーを吹き飛ばす。しかし、オレノ・グランチャーばチャクラシールドを全開にし、踏みとどまる。

「これが、ブレンパワードというのか。・・・良いね！」

オレノは笑う。ブレンパワードの・・・アンチボディの可能性を感じたからだ。己がグランチャーのパワーを最大限引き出せていない。まだまだ俺とグランチャーは高みに登ることができる。

エネルギーの放出が収まるとき、オレノは吹き飛ばされたシラーを取り、撤退する。

「勇！ちゃん比瑪！良いものを見せてもらつた！リクレイマーは今は引かせてもらおう！ではまたよろしく頼みます。」

高笑いをあげながら、バイタルジャンプを駆使して離脱するオレン。

勇はため息をつき、変わつていないと呟く。

その横で、「あつ?!オレノ・オレオ・トツテイって名前かあ。」と比瑪は納得した様子で手を叩いていた。

俺が強いんじやない

彼は彼女に触れる。

彼女は恥ずかしがるようにその肌を震わせる。
それが愛しくて愛しくてたまらない。

彼はどうしようもなく彼女を愛している。

彼は一般的なリクレイマーのグランチャーチ部隊隊員。

彼女はとても特別なアンチボディ。

種の違いなどどうでもよく、そして彼は彼女に狂い、あらゆる物を捧げ、献身的に尽くしていた。

周りから何を言われようと、彼は彼女の愛に殉じ、生きて死んでいく。

彼女がいなくなるとすれば彼もいなくなる。

愛の方程式の解はいつまでも解けることは無く。

「グランチャーチ君はいつでも美しいなあ。……いやお世辞じゃないさ本気だよ。君の身体のメリハリは美術館が逃げ出すほど優れている。両手足だつてしなやかなのに力強く、抱かれたくなる魅力がある。憂いを帶びた顔だつて俺の心の臓が締め付けられる。お尻だつて……なに？スケベだつて？ふふふそれだけ君が一番つてことさ。断言するよ。おつと恥ずかしいのかいグランチャーチ？恥ずかしがつている君も可愛いよ！ああなんて酷いんだ君は！俺はもう君しか見ることができない！君は」

「黙りなさいオレノ・オレオ・トッティ！このクインシイ・イツサーの前でその怪奇発言……恥を知りなさい！」

オルファンのグランチャーチ格納庫で、グランチャーチを磨きながら気味の悪い発言を垂れ流すオレノ。その場にいる人間はいつものことであるため、右から左へと聞き流す。

しかし、オルファンの規律を重んじるクインシイ・イツサー（伊佐美 依衣子）はそれを聞き逃す事はできない。

頬を歪ませ、心底嫌そうな顔をしながらオレノに注意を飛ばす。それに対してもオレノは、視線をグランチャーから外し、クインシーに向ける。

その目を細め、肩をすくめる。オレノはクインシーが嫌いでは無いが、少々堅物かつ短気過ぎる所は苦手である。

「何でイツサー？・プレート回収のノルマは既に達成していますよ。今日はオフ。グランチャーに愛を囁く大切な日です。文句を言われるのは心外です。リクレイマー侵害です。俺のグランチャーが泣いてしまいます。」

クインシーの目には、オレノ・グランチャーは平氣そうな様子、むしろ申し訳なさそうに見える。

「そうだ。貴様はプレート回収のノルマを達成している。しかし、だからといってグランチャーの格納庫で、人目を憚らず怪音波を飛ばすのはよくない！」

「愛は何よりも優先されます。俺とグランチャーは男と女です。」

「貴様のエゴを押し付けるな。全く、貴様の様な奴は見たことがない。」

聞く耳持たないオレノに対して呆れ果てるクインシー。

そのままオレノ・グランチャーに近づき、そのボディに触れる。

「お前はとても愛されているな。羨ましくは無いが。」

クインシーは触れた場所から暖かな感情が伝わってくるように感じる。

それに対してクインシーは微笑む。何か感じた事の無いもの。心地よい物ではあるが、それが何か、クインシーはわからない。

グランチャー特有の鋭い感情ではない。

オレノ・グランチャーは特別である。

明らかに他のグランチャーよりオーガニック・パワーが上であるし、何年もの長い月日を過ごしたような成熟した何かを感じる。

抗体反応がとてもなく低いオレノが、自在に操れる事もオレノ・グランチャーからの歩み寄りのおかげだろう。

伊佐美博士はそれに対する興味は無く、詳しく調べられた事はない。

い。

しかしクインシーはそれが何か分かればグランチャーチャー部隊の増強が可能であると考えている。

5年前。オルファンにバイタル・ジャンプでオレノとこのグランチャーチャーは現れた。オレノの出自はすぐにわかつた。一般家系出身の平凡な人間だ。しかしオレノ・グランチャーチャーはプレート反応も無しに突然現れた事しかわからなかつた。

「お前はどこから来たんだろうね。」

クインシイは微笑みを浮かべ、グランチャーチャーを撫でる。

グランチャーチャーが喜んでいると感じたクインシイは、オレノには勿体ないくらいの良いアンチボディだと思う。

「あああああグランチャーチャーがイツサーに寝取られるうああああ！でも何この感覚？昂ぶる昂ぶる！めざめちやうよおお！到達して突破しゆるううう！そんなグランチャーチャーも好きだあああああ！」

クインシイはオレノの顔面に右ストレートを叩き込んだ。

「よおオレノ！聞いたぜ。クインシイに派手に修正されたみたいだな。」

ジョナサンが面白がりながらグランチャーチャーの下で倒れ込んでいるオレノに声をかける。

オレノは虚ろな目で真下から見たグランチャーチャーの美しさに見とれている。

「…ジョナサンか、イッサーの拳は効くね。まだ痛みで動けんよ。」

そんなオレノを見てジョナサンは腹を抱えて笑う。

「はつはつは！痛みで動けないんじやあないだろ。下からグラン

チャードを視姦してるのが丸わかりだぜ。」

「バレたか。流石ジョナサン。」

オレノは名残惜しそうな表情を浮かべながら起き上がり、ジョナサンに顔を向ける。

「でっ何か用か？俺は今日オフなんだが、ジョナサンはプレート回収があるだろう？忙しいんじゃないか？」

ジョナサンはグランチャー部隊の隊長であるため、平リクレイマーのオレノと違い仕事量が多い。

オレノとジョナサンは休日が重なった時は一緒に遊ぶことが多い。グランチャー一筋のオレノはその時だけ、グランチャーと別れて行動する。他のリクレイマーからしたら何故二人がそこと仲が良いのか不思議で仕方ない。

他には元リクレイマーである伊佐美 勇とも交友がある。

大体はオレノが勇に絡んでいただけだが。

「ああ複数のプレートが見つかってな。ノヴィス・ノアの連中に先取りされる前に回収しなければならない。人手が足りんからお前に声をかけたわけだ。」

「イッサーにも言つたが俺とグランチャーはオフだ。いくらお前の頼みでもなあ。」

「はっ！ そう言うと思つたぜ。しかしながら、グランチャー部隊の戦力増強は急務だ。ノヴィス・ノアには勇の奴もいる。」

ジョナサンの頼みに難色を示すオレノ。

しかしジョナサンは知つていたとばかりに笑い飛ばす。

「ノヴィス・ノアのアンチ・ボディを蹴散らせばお前とグランチャーが強い事を証明できるだろう？だから今後連中が出張つてくる時はオレノも出るべきだとと思うぜ。」

「ジョナサン……間違つてているぜ。」

「何……？」

表情を消し、ジョナサンの説得を否定するオレノ。

ジョナサンはそれに対しても驚く。オレノはチヨロいからこれで説得できると考えていたからだ。

少しの沈黙の後、オレノは口を開く。
ジヨナサンはそれに対し息を飲む。

「俺が強いんじゃない。グランチャーが最強なんだ。ノヴィス・ノアの連中を叩きのめす事で、それを証明しよう。行くぞ俺のグランチャーチョー！出撃する！」

「相変わらずチョロすぎねえかお前。」
オレノはチヨロかつた。

第2話 僕が強いんじゃない。

「はつはあー！一人で突貫とはとんだハリキリガールだぜちゃんヒメえ！お前ら手をだすんじゃないぞ。俺とグランチャーでええ！」

「また貴方なの!? 邪魔しないでよ！」

プレートを回収中にヒメ・ブレンに襲撃を受けたりクレイマーグランチャーチョー部隊。

ヒメ・ブレンの攻撃により一枚のプレートが墜落する。

すかさず追撃を加えようとするヒメ・ブレンにオレノ・グランチャーが立ち塞がる。

「オレノ！俺たちは先にプレートを運ぶ。お前に殿は任せるぞ！」

ジヨナサンはオレノにそう伝えると、他のグランチャーに命令し離脱していく。

「逃げるの!? 待ちなさいたら！」

「俺のグランチャーを見ずにどこを見てやがる！もつと俺のグランチャーをミロオ！」

オレノ・グランチャーはソード・エクステンションを使いヒメ・ブレンに切りかかる。しかし、ブレンバーを巧みに使う比瑪はその一撃を受け流す。

「貴方に構つてゐる暇はないのよ！早く追いかけなきや！」

ヒメ・ブレンはバイタルジャンプで距離を取りつつブレンバーによる射撃を試みる。一射二射三射と打ち続けるが、オレノ・グランチャーの堅牢なチャクラシールドに阻まれる。

オレノ・グランチャーは射撃に対し微動だにしない。それはオレノが己のグラランチャーに絶対なる自信を持つてゐるからだ。

「何てパワーなの？ブレンバーが効いてない。」

「そうちちやん比瑪！わかつてゐじやないか！俺のグラランチャーのオーガニックエナジーはそこらのアンチボディを遙かに上回る！凄くない？」

「凄いのね貴方のグラランチャー！私達も負けてられない！」

ヒメ・ブレンはバイタル・ジャンプを連続で行い、ブレンバーの射撃を交えながらオレノを翻弄する。

それに対しオレノは攻めに転じるべく、オレノ・グランチャーのオーガニックエナジーをソード・エクステンションに集中させる。「ちやん比瑪え！やつぱり君のブレンパワード良いよお！俺のグラランチャーも昂ぶつてくる！もつともつと高みに昇ろうグラランチャー！」支離滅裂に叫びながらオレノは絶頂に近づく。

それに呼応するかのようにオレノ・グランチャーはソード・エクステンションを起点に光り輝く。これはオーガニックエナジーの光だ。「何をする氣!?……まさかチャクラ・エクステンション！？一人じや無理よ！辞めなさい！グラランチャーがもたない！」

「一人じやない！俺とグラランチャーで二人だ！」

比瑪はオレノを止めようとするが、オレノは聞く耳を持たない。「行くぞグランチャー！チャクラ」

オレノがチャクラ・エクス・テンションを放とうとした瞬間。墜落したブレートが光りだす。リバイラルが始まつたのだ。

突然のリバイラルに何を思つたのか、オレノ・グランチャーはオーガニックエナジーを抑えこみ、ソード・エクステンションを下げる。「…戦いを止めろと言つのかグラランチャー。君がそう言うのなら俺は従うさ。おーいちやん比瑪。一旦休戦だ。リバイラルを見届ける

ぞ。」

「休戦……？貴方リバイラルが気になるの？」

休戦発言をしたオレノはグランチャヤーをリバイラル中のプレート近くに降ろす。

比瑪はあつさりと戦いを止めたオレノに戸惑いつつも、同じくブレンを地面に降ろす。

「グランチャヤーが降りてくる？ オレノか……今はそれどころじゃないか」

コモドと共にイランダに乗り先に来ていた勇はオレノ・グランチャヤーが降りてくるのを確認した。

勇はオレノなら……いやオレノ・グランチャヤーなら悪いことはしないと考え、オレノを無視し、リバイラル中のプレートに近づく。「勇の奴もいるな。……なぜブレンに乗っていない？ いや、カナンが乗っているのか？」

オレノは少し離れた場所にいるユウ・ブレンを見やる。するとココクピットのハツチから顔を覗かし、リバイラルの光を見つめるカナンを見つける。

「……純粹なグランチャヤー乗りになれない男と女か。オルファンに居るときから辛氣臭い顔してたからな。」

オレノは勇とカナンがオルファンにいた時を思い出す。

勇はずつとモヤモヤしたものを持てこんでいたし、カナンは何処かやけつぱちになっていた気がする。

「……グランチャヤー、あいつらに何を期待しているんだ？ 僕が嫉妬しているだつて？ よくわかるね。」

オレノはグランチャヤーに語りかけながらリバイラルを見守る。

オレノ・グランチャヤーが皆に対して慈愛を持つているとオレノは思う。オレノはそれが自分だけに向いていない事に対して思う事はある。しかし、いつか必ず自らを高め、グランチャヤーに釣り合う男になり、その寵愛を一身に受けるつもりだ。

リバイラルの光が収まるとそこには2体のアンチボディが出現す

る。

見た目はグランチャードに近いが、あれはブレンパワードである事が、オレノにははつきりとわかる。

「オルファンでは双子の例は無かつたのに。」

カナンが産まれたてのブレンに近づきながら呆然と呟く。すると双子のブレンパワードの身体に色が宿る。

「ブレン・・・私のブレンパワードになつてくれて？」

カナンは手をかざしながらオレンジ色のブレンパワードにそう伝える。それに応えるかのようにその場で足を崩し、コクピットに乗れるようになるブレンパワード。

その衝撃でブレートによじ登ろうとしていたヒギンズはもう片方の黄色いブレンパワードの前に転がり落ちる。

「あつ・・・ああつ。」

オレンジ色のブレンパワードと同じようにその場で足を崩し、黄色いブレンパワードはヒギンズに対し、コクピットを開く。

「ヒギンズさん!? 大丈夫でしたか?」

「何とか・・・潰されなかつたわ。」

心配して声をかける勇に対しヒギンズは大丈夫だと答える。

「良かつた・・・カナンは?」

ヒギンズの無事を確認した勇はカナンにも声をかけて近づいていく。

「オルファンでもこう言う事あつたの? 双子とか三つ子とかつて言うの。」

ヒメ・ブレンのコクピットから身を乗り出して疑問の声をあける比瑪。それに対し、大声で答える人物がいる。そうオレノだ。

「いーや! オルファンではこんな事は無かつたはずだ! なあ勇?」

「オレノ・・・お前の言うとおりだ。確かにこんな事は初めてだ。」

オレノに問い合わせられた勇は複雑そうな表情をしながら答える。

「やー良いものを見たわ。俺のグランチャードも喜んでますよ。アンチボディの双子が誕生する場面何て見たことがない。グランチャードも初めて見るつて言つてるしな。」

その場にオレノの拍手が鳴り響く。その場にいるメンバーはリクレイマーであるオレノに警戒し身構える。

「産まれたてのアンチボディの前だ。戦うのは良くないよなあ勇！俺は一旦退いてやる。また後で戦うことにしてよ。」

「……この戦力差だ。グランチャヤーが傷つくのが怖いかオレノ？」

上から目線でモノを言うオレノに対し、勇は皮肉げに返す。

それに対し、飛び立つグランチャヤーのコクピットから顔を覗かし高笑いするオレノ。

「ハツハアー！面白い事を言う勇だな。知っているとは思うが俺のグランチャヤーは最強なんだ。例え全員で襲いかかってきても傷なんてつかない。今のブレンパワードではなあ！」

そう言い残し、オレノ・グランチャヤーはバイタル・ジャンプを使い、その場から離脱していく。勇はオレノの言うとおり今のブレン・パワードでは、オレノ・グランチャヤーのチャクラ・シールドを突破できないと思う。ユウ・ブレンなら全力でやれば可能性はある。しかし、他のブレンではそうはいかないだろう。

「……リクレイマーの思考に染まつてないのにやりにくい奴。」

そう呟く勇の表情は悪いものではなかつた。

「……んで。産まれたてのブレンパワードが下がつてないのはどう言う事なんですかねえ？」

オレノは再び戦闘が始まつた地点から少し離れた所でぼやく。

リバイラル後一旦戦闘中域から離脱したオレノ。その視線の先にはコクピットに映し出された、ふらふらと飛びながら戦闘に参加しようとする双子のブレンパワードがいる。それに対しても呆れたような表情をしながら、オレノ・グランチャヤーのコクピット内で寛ぐ。

「赤ん坊のいる戦争なんてやつてられんよなグランチャヤー？全く、他

のアンチボディは互いに憎み合いすぎじゃない？」

グランチャードと語り合いながら時間を過ごすオレノ。

遠目から見るにはジョナサン率いるグランチャード部隊が優勢のようだ。今もジョナサン・グランチャードが斬りかかり、ヒメ・ブレンが必死に抵抗しているのが見える。

「ジョナサンも楽しそうだし、特に心配することはなさそうだな。勇とちゃん比瑪はどこまでやれるかな？ グランチャード、君はどう思う？」

オレノがそう尋ねると同時にオレノ・グランチャードが動き出し、戦闘領域に向かつて移動し始める。オレノはそれに驚き声をあける。「うおあ！？ どうしたんだグランチャード？ ……何？ 産まれたてのグランチャードが……誰が乗っている？」

オレノはグランチャードのコクピットに映し出される映像を見る。そこには全体が黒く赤いラインが入ったグランチャードが写っていた。「肌が綺麗だ。赤ん坊だからか……いやグランチャード君の方が綺麗だよ。どんな宝石にも負けない煌びやかな……何？ もういいって？ 謙虚だなあグランチャード。そこも好き。」

オレノが怪電波を流し始めようとすると、オレノ・グランチャードに止められる。オレノ・グランチャードは呆れた様子だが、オレノは気にもせずグランチャードに愛を囁く。

「なんだ……あれは違うぞ！ カナン！ 避けろ！」

ユウ・ブレンの上を通り抜ける黒いグランチャードを見て勇は直感的にただのグランチャードではないと感じ、カナンに警告する。

黒いグランチャードはカナン・グランチャードに斬りかかる。カナンは何とかブレンバーにより防御するが、弾かれ体勢を崩す。

「ふつはははははつ……こいつは俺の思う通りに動いてくれる。アンチボディの出来損ないなんぞ。このエッガ・グランチャードで叩き落としてやる！」

黒いグランチャーリーに乗るエッガは荒々しくグランチャーリーを乗り回し、宣言する。

「グランチャーリー乗りと言う奴は・・・産まれたばかりの者にまで闘争心を植え付ける。」

勇は、エッガ・グランチャーリーの艶やかな肌を見てリバイラルしたばかりの赤ん坊であることを確信する。

エッガ・グランチャーリーは戦っているジョナサンと比瑪に割り込んで行く。勇はすかさず追いかけジョナサン・グランチャーリーとエッガ・グランチャーリーに対峙する。

「比瑪はヒギンズ達と後退しろ。」

「エッガ！リバイラルさせた者をすぐに戦場に投入するな！混乱する。」

勇は比瑪に後退するように促し、ジョナサンは割り込んで来たエッガに対し警告する。

「舐めてもらつては困りますぜジョナサン・グレーン。こいつはとつても良く俺の言う事を聞いてくれる。」

ジョナサンに対しそう宣言するエッガは高速で近づいて来るオレノ・グランチャーリーに敵意を向ける。

オレノ・グランチャーリーは他のアンチボディを無視し、エッガ・グランチャーリーとある程度の距離で停止する。

「エッガ！赤ん坊の教育に悪いぞ！一度下がれ！」

オレノはエッガに対し、後退を命令する。

今エッガ・グランチャーリーは興奮しすぎていて、何が起ころかわからぬ。チャクラ・エネルギーを制御できていない、グランチャーリーが保たない可能性がある。

「うるせえ！前からお前は気に入らなかつたんだ！裏切り者と一緒に墜ちろ！墜ちまえよお！」

エッガはオレノの命令を無視。

それどころか、ソード・エクステンションをオレノ・グランチャーリーに向ける。

エッガの闘争心に応えるかのようにエッガ・グランチャーリーはチャク

ラ・ソードを爪のように展開する。そのチャクラ・クローラはオレノ・グラントチャーに向かつて伸びる。

「エツガ！俺のグラントチャーのパワーを突破できるとでも？甘いんだよ！」

オレノはグラントチャーのチャ克拉・シールドで真っ向から立ち合おうとする。

それを見たジョナサンは直感的に叫ぶ。

「オレノ！無理だ！流せ！」

エツガ・グラントチャーのチャ克拉・クローラとオレノ・グラントチャーのチャ克拉・シールドが接触し火花を散らす。一瞬の膠着の後、チャ克拉・シールドにヒビが入り甲高い音と共に碎ける。

「あひい！」

ジョナサンの叫びを聞いたオレノ。

情け無い声を上げ、ドヤ顔から一瞬で崩壊した顔面をしながらも、ギリギリでチャ克拉・クローラを上体を後ろに逸らし回避する。

「チャ克拉・ソードが伸びた！何だこのパワーは？」

「産まれたての赤ん坊が何でチャ克拉を!?」

「あぶぶぶぬえ！チャ克拉・シールド碎けりや!?」

ジョナサン、勇、オレノは三者三様の反応で驚く。

「はははははっ！いいぞグラントチャー！もつと壊せ！壊しちまえよ！裏切り者の勇も！アホのオレノも！アンチ・ボディの出来損ないも！」

！」

エツガ・グラントチャーはチャ克拉・クローラを無闇矢鱈に振り回す！止めようとするジョナサン、勇、オレノだが、チャ克拉・エネルギーが膨大で近づくことすらままならない。

「アイツ・・・持つか？」

「エツガ！しつかりとコントロールしろ！敵はブレンパワードだろう！」

「ふへへ！シネよ！壊れちまえよ！裏切り者なんぞ！居なくなつてしまえ！」

「無駄だジョナサン！今の奴には聞こえていない！」

ジョナサンはエッガに声をかけるが、エッガは反応せず、支離滅裂に叫びながら暴れ回る。

それを見た勇はジョナサンに無駄だと伝える。

勇に指摘されたジョナサンは舌打ちしながらチャクラ・クローラをバイタル・ジャンプで躲す。

「ひいん！ チャクラ・クローラ恐ろしやー。」

オレノは涙目になりながらチャクラ・クローラを危なげなく躲す。

余裕がなさそうに見えるが、オレノ・グランチャードの回避は完璧であり、近づきすぎない限り当たる事はない。

「おひー！ ··· あれは？」

オレノはエッガ・グランチャードの真下に双子のブレンパワードが互いにくつ付きながらブレンパワードを構えているのに気付く。

オレノは双子のブレンパワードに集まるチャクラ・エネルギーを感じ取り背筋が凍るような感覚に陥る。オレノは反射的に叫んだ。「エッガ！ 避けりや！ があつ！」

オレノは舌をかんだ。

その瞬間、双子のブレンパワードから途方も無いほどのチャクラ・エネルギーが放出され、エッガ・グランチャードに直撃する。

「どうしたよお！ 僕のグランチャード！ 力があるんだろう！ 貴様はジョナサンやオレノに負けない力を持つているんだろう！ そう言つたじやないかあ！」

エッガはグランチャードのコクピット内で叫ぶ？ グランチャードから伸びた体組織がエッガの身体にめり込んでいく。

「お前は俺と一緒にあいつらを潰してオルファンおぶえあ」

その言葉を最後にエッガはグランチャードのコクピットに潰される。エッガ・グランチャードは煙を上げ、四散する。

「あんな現象なんて。ジョナサン！」

勇は啞然としているジョナサンに組みつく。

「ジョナサン・グレーン！ 姉さんと親父とお袋に伝えるんだ！ オルファンに従う事は絶対に正義じゃない！ オルファンで人類を抹殺する事も！ 地球を死の星にする事も絶対にさせない！」

「ゅううう！」

ユウ・ブレンの左ストレートがジョナサン・グランチャーの頭部に直撃し、吹き飛ぶ。

「今言つた事を伝えるんだ！ いけえ！」

「うつうわあああ！ 勇めええ！」

「ジョナサン！」

吹き飛ぶジョナサン・グランチャーをオレノ・グランチャーが受け止める。

「伝えろ！ そのために追撃はしない！」

勇はその言葉と共にバイタル・ジャンプで後退する。

ジョナサンは屈辱に顔を歪めながら、ヘルメットを乱暴に取り外す。

「勇は！ 僕をメッセンジャーボーイにしたのか！ そのために見逃してくれたと言うのか！ あやつは！」

「落ち着けジョナサン！ あのまま戦つてもこちらが有利に戦えたはずだ！」

以外にもオレノは激昂するジョナサンを落ち着かせようとする。

ジョナサンはオレノを睨みつけ、歯ぎしりする。

「だとしても！ 奴が見逃してくれた事には変わりない！ この屈辱！ 必ず次で晴らす！」

「・・・ジョナサン。 そうだ負けたとしてもまだ次がある。 次に勝てば良い！ ・・・まあ俺のグランチャーは負けて無いけどな！」

「お前後で殴るわ。」

ドヤ顔するオレノに感情を無くしたかのような冷たい表情に切り替わったジョナサンは、オルファンに帰還するべく、海に潜行していくのだつた。